

岡田 純一

『フランス経済学史研究』

御茶の水書房 1982.2 373+44 ページ

著者は「スミスとフランス古典派経済学」を近年の研究テーマとしている。本書はこのテーマに沿った論文集であり、著者の病氣療養期間をはさむ70年代(特に後半)の論文に補筆訂正した上で Sismondi に関する2章と序章の書下しを加えたものである。

著者が強調する通り、「学問としての経済学は英仏両国の間のいわば球の投げ合いを通じて形成された」のであり、重農主義者から Walras までフランス経済学は学史上独自の重要な地位を占めてきた。しかもイギリス古典派経済学との密接な関連・交流の下に発展してきた。本書はその「経済学のフランス的伝統」を全体的・系譜的に辿り、同時に英仏古典派経済学の交流関係を問おうとする。

通史では、Schumpeter の『経済分析の歴史』の様

な大部のものかフランス人の手になるもの以外では、重農主義者の後は Walras が登場するだけといっても過言ではなく、通常フランス古典派が抜け落ちてしまっている。確かにイギリス古典派経済学は当時のその現実を背景として強力な影響を与えた理論群であり、その研究が主流となるのは当然だろう。とはいえ余りにも片寄りが激しい。はしがきでまず指摘される通りフランス経済学の学史的な研究は極めて乏しく研究者数も少ない。

このような状況の中で本書の出版の意義は実に大きく、歓迎すべきである。この分野の研究が本格化しておらず、未開拓な状態にある中で、本書は空白を埋め今後の研究発展の足掛りとなる開拓者の業績であるといえる。

本書は序章、Quensnay 論(1, 2章)、Say 論(3, 4章)、Sismondi 論(5, 6章)及び Walras 論(7, 8, 9章)と Smith に関する補論2編からなり、巻末に「フランス経済学史文献」が付されている。(この目録は必ずしも本文引用文献に限られない。)

本書の特色として、フランス経済学を全体として系譜的に捉えようとする視点及びイギリス古典派との対比の姿勢(実際には Smith との対比だけであり、今後展開する余地がある)をまず挙げるべきだろう。全体像を捉えようとする方法的態度は、4人の対象各々の時代的個人的背景を踏まえた上で理論を体系的に理解しようとする点で一貫している。特にともすれば従来一面的に流れてきた Say, Walras の理解の是正に大いに力がある。

次にフランス的伝統から切離され勝ちであった Walras を元の伝統の中で読もうとする位置付けも本書の特色に数えられる。Walras について言えばこの位置付けによって学史上の課題の1つ、古典派経済学と「近代経済学」の間の断絶の有無、理解の仕方が変わる。特に Say を媒介とするフランス古典派経済学の Walras への影響をときほぐすことによって、Walras の獨創性は一層明解に示されるであろう。学史上「始点」と位置付けられる Walras を、逆にそれまでの学説の「終点=総合点」として位置付け評価する試みとしてみれば、本書の構成は、刺激的でさえある。

加えて、今後のフランス経済学史研究のための問題提起を多数含む点も特色であろう。

序章は前半でフランス古典派経済学成立前史を概観し、独立科学としての経済学の成立までの英仏両国間の思想交流の緊密性を示し、後半で「フランス経済学の系譜を一貫する特徴」として「(1)再生産=経済循環の把握、(2)企業者概念の析出、(3)資源配分論の視点、(4)人間主体の探究」の4点を挙げ、学史的に辿る。これら基本

的視点(うち(2)以下は経済活動に於ける人間の主体的働きかけを重視する認識の仕方としてより大きく括れるだろう)は、フランス的伝統をさぐる上で大いに助けとなるであろう。もっとも後の諸章の各々でそれが総て検討されているとは言い難い。これは論文集という性格上止むを得ぬことで、むしろ、今後の研究のためにヒューリスティックな視点を与えたと評価すべきであろう。

以上の他、Say, Walras 論で触れられている数理的認識を中心とする方法論的特色も視点の中に加えておくべきではなかろうか。

Quensnay 論。第1章では時代的個人的背景を明らかにし、「経済表」が諸前提の吟味の上で解説される。第2章では『原表』を未完成とする通説を再検討し、そこでの循環が分析される。問題は①「原前払いの利子」と②貨幣形態をとる不生産階級の年前払いと生産階級生産物の流通、この2つが『原表』に明示されていない点の解釈である。著者が通説に反し「決して未完成形態の経済表ではない」と主張する鍵は、著者のいう「二重の三〇〇リーヴル」にある。地主階級—生産階級間取引、300リーヴルに二重の意味をもたせて、「原前払いの利子」を読み込み、同時に生産階級—不生産階級間取引が暗に示されていると解釈して、『原表』を論理的に完結したものと捉えようとする意欲的主張である。しかし300リーヴルが何故「二重」に読み込めるのか、そう読み込んで『原表』が完成形態にあると主張せねばならぬ根拠はどこにあるのかを、もう少し詳述する必要があると思う。

J.-B. Say 論。ここでは販路法則を含む体系全体が検討される。第3章では、Smith との関連で、Say の積極的主張である industrie 論が考察され、販路法則が「価格論と連関させて理解される必要」が主張される。第4章では Say の方法、価値論、貨幣論、販路説が全体像との関連の下に概観される。講演録である付論は、industrie という言葉が Say, Smith の議論の中で、どのような意味を持つか、を発端とする学史論になっている。

Say は industrie に「産業」という意味だけではなく、人間の生産活動での働き総てを包含する概念を込めている。それは生産や企業者の概念と共に Say の「経済本質論的視角」から導かれる重要な概念である。何とも訳し難いのだが、重要なだけに訳語を与えて欲しかった。(例えば「産業活動」はどうか。)

販路法則は長期均衡論的視点から価格論と結合して理解され、人間の欲求充足という角度から検討される。注

目すべき見方である。進んで需要要因の重視(「供給は需要に従う」*Epitome*)と販路法則の関係、及び Say 価格論が Walras 一般均衡論の先駆であることを、もう少し説明してもらえれば有難かった。

Sismondi 論。第5章は『商業的富』を中心としてその背景と、後の著作での古典派経済学批判への転回とを論じる。Sismondi の視点が産業革命の進展との関連で示されている。第6章は『新原理』での古典派経済学批判と『研究』での価値論恐慌論を論じる。この2章では「所得を中心とする社会的再生産機構」とそこでの有効需要の意義を重視し、「人間の経済学者」としての Sismondi の特徴を明確にする。著者は、この2章ではテキストをして語らしめる方法を採用しているように見える。

Walras 論。第7章は Walras の略伝に続き、『要論』の構成と方法、交換と生産の理論を説明する。第8章は M. Boson に依拠し、体系全体の中での『要論』の位置付けと経済政策論を展開する。第9章で『書簡集』を利用して『要論』発刊時の事情と Jevons との往復書簡が解説されている。

Say 同様、Walras の通例の評価は偏っている。Walras 研究が専ら理論の面からだけで、学史的研究が未開拓なことを理由に挙げ得よう。最近事情は好転しているが、第8章の原論文は学史的研究の嚆矢であろう。Walras の「経済学体系が相当にラディカルな批判的側面を包含していたことは注目されてよい」のであり、その全体系との関係で「自由競争」の内容なり独自の社会主義観が、今後検討されるべきだろう。「自由競争」の内容の批判的側面をはっきり著者は指摘している。

本書のテーマから言えば、第7章「生産の理論」の解説はもっと簡略化して他に譲り、むしろ Say との関係なり、再生産=経済循環の分析視点から一般均衡論の意義を論じた方がよかったと思う。

以下気掛りな点を指摘し教示を請いたい。

第3章(p.122)で profit d'industrie は, industrie の「利潤」より「利得」か「稼得」の方がよくはないか、又第4章需給論で「究極において需要は生産に規定される」(p.153, 傍点は引用者)のか。文脈からも主客関係が逆なのではないだろうか。

第7章(p.278)「しかし科学的に……分れる」は著者の意見と思うが Walras の要約にはさまれて若干紛らわしい。

Walras 父子の継承関係についての著者の評価(p.270, p.291)には同意し難い。経済政策的命題、哲学的背景、社会科学観、用語法、スタイルについてははともかく、少

なくとも価値論(特に稀少性概念)に関しては、評者の試みた比較では、Léon は Auguste が「持っていないか、殆ど持っていない功績を父のものとしている」(Bousquet)とすべきだろう。

第8章、「資本」と「資本財」の区別を、Walras はきちんと立てている。やはり用語を区別して議論すべきであろう。また *Théorie mathématique de la richesse sociale* の訳名(p.302)及び revenu の訳語(p.300)は第7章の訳、『社会的富の数学理論』及び「収入」に揃えるべきである。「絶対的自由競争」は Walras の用語だが「完全自由競争」もそうなのだろうか。特別な意味を含むのであれば、それを明示すべきだろう。最後に注(27)(p.306)は『応用経済学研究』からの引用ではなく、Boson(p.238)からの引用である。訂正漏れになっている。本書は今後参照されるべき著作であり、影響も大きいと考えるので指摘しておきたい。

以上、本書の紹介と共に注文と疑問点の指摘を試みた。しかし注文は望蜀の言であり、指摘は枝葉末節に属する。根幹を揺がすに至らない。先述の通り、本書の開拓者の性格は高い評価に値する。まず目指すべき、そしてさらに前進するための、ベースキャンプが本書(及び巻末目録を拡充した『フランス経済学史文献目録』と)により設置されたのである。

[中久保邦夫]